

正確ながん情報の入手を

がん社会 を診る

中川 恵一

事です。

情報収集と言えばインターネットですが、SNSに広がるがん情報を名古屋市立大病院の医師がファクトチェックしたところ、44%が誤りで、31%に有害な情報が含まれていたといえます。ネット情報は玉石混交で、患者さんはその見極めが大切です。

ネットに広がるがん情報で太鼓判を押せるのが、国立がん研究センターが手がける「がん情報サービス」です。

すべてのがんについて治療法や副作用、再発後の選択肢まで詳しく解説しています。「診療ガイドライン」に沿った情報で、最も信頼できます。

診療ガイドラインは医師向けに最適な治療法を解説したもので、一般市民が読み込むのは難しいと思います。他方、患者や市民向けのガイドラインもあり、一般の方が理解しやすいように配慮されています。

肺がんや大腸がん、膵臓(すいぞう)がん、胃がん、乳がん、前立腺がんなど多くのがんについてネット上で公表されています。一部は書籍版も販売されています。

さらに、がん患者における気持ちのつらさガイドライン、がん免疫療法ガイドライン、骨転移診療ガイドラインなど、臓器横断的なガイドラインもあります。診療ガイドラインの検索には「Mind

sガイドラインライブラリ」のサイトが便利です。

残念なことに、「がん情報サービス」や診療ガイドラインどころか、どうみても怪しい情報にだまされる患者が後を絶たないのも事実です。

教育レベルの高い人ほど、科学的根拠のないがん治療を受けやすいというデータもあります。私自身、高学歴の患者が怪しい民間療法を選ぶ姿を何度も目にしました。自身の判断力に対する過信が原因かもしれません。

日本では高学歴であっても健康教育を十分に受けているとは言えません。一部の私立エリート中高進学校で、保健の授業の回数が少ないことも大問題です。

日本人のヘルスリテラシーは世界でも最低ランクです。日本はインドネシアやミャンマー、ベトナムより下の最下位で、改善は待ったなし。学校で必修化された「がん教育」に期待しています。

がんは最初の治療がうまくいかないと、完治が遠のきまします。病院選びも大きな力になります。握りますが、治療の途中で病院を変えることはまずできません。

一度がんの治療を始めるのと、事実上後戻りができません。「敗者復活戦なしの一発勝負」に近いと言えます。治療前の情報収集は非常に重要です。

がん治療は一種の情報戦です。がんを知り、正しい情報を手に入れることがとても大



イラスト 中村 久美